

# 第8回西方音楽祭

## メインテーマ

「フォルテピアノってどんな楽器？チェンバロとどう違うの？」

### ◆ 3つのメインコンサートを聴いて、私なりにまとめたこと。

#### [チェンバロは、より感覚に訴える楽器]

時代の要請、と言えば、それまでですが。爪で弦をはじくチェンバロは、音自体が大変美しく、音の余韻が後に残ります。強弱は、沢山の音を鳴らしたり、少しの音を鳴らすことで、やや錯覚も交えて、耳が捉え、時おりストップ操作で段階的に音色も変えつつ、細やかに歌いつつも、どこか冷静に、美しい音楽を作り上げていきます。

#### [フォルテピアノは、より感情に訴える楽器]

ハンマーで弦を打つフォルテピアノは、音の余韻は少ないけれど、指で打つ強さを微細に加減できるので、弱音から大きな音まで自在に操ることで、感情的高まりを表現することに長けています。西方音楽館のワルター・モデル・フォルテピアノは、弱音が殊の外美しく、心がふっと、奪い取られてしまいます。また、発音が明瞭なので、雄弁に、細やかに語るのが得意で、演奏者が伝えたい思いを、かなり直接的に表現することが出来ます。

#### 比較に用いられた楽器は、

チェンバロ：ラブレッシュ・モデル・チェンバロ 横田誠三製作

フォルテピアノ：ワルター・モデル・フォルテピアノ クリストファー・クラーク製作

どちらも銘器。銘器同士の対決、いや比較。しかも銘器を演奏なさるのも、川口成彦さん、大塚直哉さん、加藤美季さんというなんととも贅沢な内容でした。 [中新井 紀子]

### ◆ 川口成彦 フォルテピアノリサイタル (2023年3月26日)

私が初めてフォルテピアノの演奏を聴いたのは、2016年西方音楽館での川口さんの演奏会でした。その時私は「フォルテピアノ」が何なのかも知らず、館長の中新井さんに「ともかくお勧めだから」と言われ、失礼ながらもなんとなく足を向けた演奏会でした。けれど、川口さんが紡ぎだすフォルテピアノの降ってくるような音に包まれる幸福感、その音楽にどう表現してよいかわからないほどの感動を覚えたのでした。それから西方音楽館での6回の演奏会、毎回毎回その前の演奏会で覚えたものを上回る感動と喜びを与えられる幸せが続いています。

川口さんの演奏会は、レクチャーコンサートではありませんが、その曲についてのお話をお聞きすることができます。誠実な人柄がにじみ出るお話もこのコンサートの楽しみでもあります。また、プログラムにほぼ毎回入るスペインの曲がとても素敵で、これも私の楽しみです。

大塚直哉さんがやはり西方音楽館でのコンサートで、「どんなに頑張ってもマイクでは拾えない音があるので(CDで再現できない)是非このホールで降ってくる生の音を聴いてほしい」とおっしゃっていました。木洩れ陽ホールで、今年もまた川口さんの演奏を聴くことができ本当に幸せでした。とは言え、川口さんのCDもとても良いです。どれもとても意欲的な選曲で、私の長距離ドライブの必需品です。



※子どもの時ピアノを習っていた方、お子さんがピアノを習っている方(もちろんそれ以外の方も)どうぞ川口さんのCD「Au clair de la lune」の6曲目、タイトルになっている「月の光に」をぜひお聞きください。驚きと感動を覚えること確約します！

[本橋 撰：友の会会員]

### ◆ 大塚直哉レクチャーコンサートに参加して (2023年4月2日)

4月2日(日)に行われた、大塚直哉レクチャーコンサート「フォルテピアノってどんな楽器？チェンバロとどう違うの？」に参加した。

私が西方音楽館のコンサートに通い始めて2年ほど経つが、チェンバロやフォルテピアノの生演奏に触れているうちに、私自身も演奏したくなってしまい、3月からチェンバロのレッスンに通い始めたところである。なので今回は今まで以上に、絶対に聴きたい！という想いで参加した。

演目は以下の通り (○…チェンバロ、●…フォルテピアノ)

○J.S. バッハ：プレリュード 変ホ長調 BWV 998/1

○J.H. ダンゲルベール：プレリュード 二短調

○F. クープラン：神秘の障壁

○L. クープラン：組曲 二短調

●D. スカルラッチィ：ソナタ 長調

●W.F. バッハ：フーガ 二短調

J.S. バッハ『平均律クラヴィーア 第1巻』から

●プレリュード 変ロ長調

●プレリュード 変ホ長調

○プレリュードとフーガ 変ロ長調

○プレリュードとフーガ 嬰ト短調

○●即興演奏～C.P.E. バッハの「自由な幻想曲」に倣って

●W.A. モーツァルト：自動時計のためのアンダンテ ヘ長調

○J.S. バッハ：シャコンヌ BWV 1004/5

このホールでのコンサートの魅力は、演奏だけでなく、演奏者の解説が楽しめるところだと思っている。今回はレクチャーコンサートだからなおさらだ。

チェンバロからフォルテピアノ、そして現在のピアノに至るまでの音楽史を聞くことによって、その当時の作曲家や演奏者のより良く演奏したいという想いとともにより楽器が発展してきたということがとてもよくわかる解説であった。

そして一番印象に残った言葉は「鍵盤楽器は大は小を兼ねない」ということだ。鍵盤の数だけではなく、音の出し方・構造が違うため、その音色はほかの楽器では置き換えることができないとのことであった。

大塚先生は初心者向けのワークショップも行っているのでも、ここでも初心者に参加して頂き、古楽器を多くの方が楽しむきっかけになればと感じた。 [齊藤 加居：友の会会員]



### ◆ 国際古楽コンクール<山梨>入賞記念コンサート (2023年4月8日)

加藤美季：フォルテピアノ 佐藤裕希恵：ソプラノ 満江菜穂子：クラリネット

#### はじめから

第8回西方音楽祭、3番目のメインコンサートは「第33回国際古楽コンクール<山梨>(2022)入賞記念コンサート」だった。同コンクール第1位フォルテピアノの加藤美季さんによる、ソロだけではなく、歌やクラリネットも交えた、彩り豊かなプログラムだ。このコンサートに使用されたフォルテピアノはアントン・ヴァルター 1795年モデル。ざっくりした言い方で恐縮だが、モーツァルト(1756-1791)時代の楽器で、ウェーバー(1786-1826)シューベルト(1797-1828)などよりさがる時代の作品を聴く機会だった。加藤さんは「このヴァルターは、シューベルトやベートーヴェンの求める音楽でも演奏できる豊かな表現力をもつ」という。名器を名手が演奏するコンサートだったわけだ。掉尾を飾る「岩上の羊飼ひ」(シューベルト)は、二人の作家による複数の詩をつなげて一つの歌曲としている特殊な作品だ。内容を要約すると、

岩の上から深い谷に向かって歌うと、木霊が帰ってくる

彼女ははるか遠くの地に暮らし、私は孤独だ

春が来ようとしている。旅立ちの用意はできたか。

演奏に十数分を要し、音域も広く、歌手には様々な技量が求められるという。動画を検索すると、クリスタ・ルードヴィヒ、エリー・アメリック、キャサリン・バトルといったかつての錚々たる女声歌手に遭遇する。歌い手を選ぶ曲なのだろう。この日の「岩上・・・」は、表情豊かに「シューベルトの歌」をじっくり味わわせてくださった。今回のソプラノ佐藤裕希恵さんも2015年の山梨、1位入賞者だ。山梨国際古楽コンクールが1位入賞者を出すことは少ない。これまでに14回、審査は厳しいと言えるだろう。それだけにその中には、前田リリ子(フルート)、西山まりえ(チェンバロ・ハープ)、桐山建志(ヴァイオリン)、中川岳(チェンバロ)といった、現在斯界で大活躍のアーティストを認める。今回の西方の聴衆は16名と少なかった。富山市の桐朋学園大学院大学『コンチェルト実習公開授業』に参加したことがあるが、200名ほどの市民が集まり、「大学院生の成果」を聴き分け、励まし・称賛さまざまな拍手で地域の音楽文化を創造していた。西方音楽館とその聴衆も、これからはばたく若い演奏家をはじめから支える存在になり続けたい。



[高田 良久：友の会運営委員・糖尿病専門医]